

堤 玄立著

## 『信と証 親鸞教学序説』

幡 谷 明

本書の著者である堤玄立氏は、これまで長年にわたって、仏教の学術専門書の編輯に携わってこられ、その方面で深い学識と優れた力量を発揮せられてきた。星野元豊博士の序言にも触れてあるように、金子大栄編『真宗聖典』や、多屋・横超・舟橋編『仏教学辞典』等は、今日優れた学術書として高い評価が与えられているが、その編輯、刊行に果された氏の隠れた功績は、極めて多大である。筆者のあとがきによると、永年その出版が待望されてきた『仏教史辞典』も、氏の絶大な努力によって、最近ようやく刊行の目途がついたということである。本書はそれを機縁に、これまで高田学報・印仏研究・真宗研究・記念論文集等に発表せられてきた労作を整めて、出版せられたものである。

本書の内容は、次のような構成になっている。

序章 信と証—親鸞の宗教の基本的立場—

本論 第一章 教 一、「教」ということ 二、「廻向」について

第二章 行 一、「大行」論—岡・信楽両教授の所説を

縁として— 二、選択本願念仏—源空か

ら親鸞へ—付、師に遇う

第三章 信 一、「欲生我國」の意義 二、二種深信考

—親鸞の信における時の構造— 三、宿

業について 四、宗教的決断—「三願転入」のおぼえがき— 五、即得往生—「歎異抄」第十五条— 六、親鸞の現世利益

第四章 証 一、救済の根拠—久松真一博士の浄土真宗

批判を縁として— 二、「如」の意味

第五章 仏身・仏土 一、浄土の存在と意義 二、「無

量光明土」について 三、「浄

土」の意味するもの

第六章 教団・教学 一、教団—信共同体 二、教団・

教学と歴史的現実 三、閉ざさ

れた教学と開かれた教学 四、

「浄土真宗と倫理」についての

管見

付録 一、真慧上人の往生義 二、「御書」成立考—その編輯

意图を中心に—

以下、目次に従って、逐次そのあらましを紹介することにする。序章では、横超の直道とされる真宗の特質について、まづ聖道門および浄土門異流が行を主とする自証教—行証道であるのに対し、浄土真宗は信を主とする救済教—信証道であると規定し、次いで、信仰による人間の回復を主とする信の宗教としてのキリスト教と対比すれば、菩提心そのものである信によって証菩提を究極とする真宗は証の宗教というべきであるとして、信の宗教としての浄土真宗における証の意義について考察する。著者はそこで、機法二種の深信を内容とする信の一念は、我々の絶対悪が如来の絶対善によって転ぜられることにより、未来の証（大涅槃）へと

開かれた正定聚に入るといふ現在の自覚であるとともに、一切衆生の解脱を求める悲願の自覚において、未来の証である還相を往相の現在に常行大悲の益として生きる現在の自覚に他ならないとし、それが絶対他力一証の未来を中心とする点において、信一念の現在は、道元の説く現在中心的絶対現在の時間論とは異なることを論述している。

第一章の一の教ということでは、まづ親鸞が大経を真実教と決択した真実の意義について、真実は、法の問題であるだけではなく、末法の到来という歴史的状况における機の自覚において、今明らかにされている真実として、機の問題であるとともに、時の問題であるとして、その領解を述べる。親鸞における獲信は、如来の催しという絶対他力的決断によるものであるが、その本願成就の時は、施設された方便としての教における客観的權威を通して、そこに教をして教たらしめている絶対主体的な根拠を見出し、そこから教の真飯を明らかにする方向を辿って開かれた。そこによりき人、法然において結実している弥陀の本願開頭の歴史ということがあり、それが親鸞における絶対的自由による己証に他ならなかった。その伝統と己証の即一、伝統の不易即流行のところにのみ、時代教学は形成されると語る。この廻向論では、親鸞教学の特質である二種廻向論について考えるには、まづ浄土の意味が究明されるべきであるとして、如来および浄土は、それに対応する衆生に対して逆対応の關係に立つものであり、信心は、その如来・浄土と衆生の対応の關係即逆対応の關係をあらわす名号によって、自己否定的に絶対者に接するところに開かれることを、主として星野元豊博士の所説に基づいて、弁証している。著者はそ

こで、凡夫における信心決定は、不断煩惱得涅槃として自己が真に本来の自己となる道を開くものであり、その本来の自己こそ還相の主体となるものであること、そしてそのような真の自己を成就する南無阿弥陀仏の廻向においては、往相即還相、還相即往相ということが成立つことを述べ、鈴木大拙博士・金子大栄師・広瀬泉博士の所説を引用してそのことを証明している。

第二章の一大行論では、衆生の称名念仏という実践の意味と、その実践をして実践たらしめるはたらきそのものとしての名号という意味との二義を含む大行について論述する。著者はそこで、近年、行の問題を現実の具体的な行爲の実践という視点から捉え直す意図からなされた、龍大の岡・信楽両教授の論文の検討から始め、それに対する著者の見解を次のように述べている。親鸞における獲信という絶対的事実は、一人における出来事として内在的事実であるとともに、根源的な如来の行念仏の行に基づくものとして超越的事実といふべきものであるが、親鸞が念仏を大行と名づけたのは、その獲信という絶対的事実の根拠をそこに見出したからである。すなわち、称名は、諸仏の称名という超越的行が衆生の如実の行業としての称名の中に内在的行としてあらわれたものであり、従ってその内在的行がそのまま超越的行であるところにそれが大行といわれる意味があると結んでいる。この選択本願念仏論では、選択本願念仏の意味に関する法然・鎮西・西山・親鸞の領解についてその要点を紹介し、著者の領解として、仏の本願の選びに対する衆生の選びとしての宗教的決断の重要性を指摘している。

第三章の一の欲生我國の意義は、宗学における本願の三信の解釈において、従来、信業を中心とし、欲生はその異名に過ぎない

とみる傾向が主流を占めてきたことに對し、曾我量深師が、三心中の信業は自相、至心は信業の果相、欲生我國は信業の因相であるという独自の立場を提起されたこと、すなわち、如来の欲生心が衆生の意識の上に具体化したものが真実信心であり、その信心は願生心として発動することを明らかにせられたことの重要性に注目して、欲生心についての領解を述べたものである。著者の見解は、如来の欲生心を根拠とする衆生の願生心は、それが凡夫のものである限り、煩惱の願生心というべきものであるが、愈々熾烈になる煩惱の願生心も、如来にそのすべてをまかす時、煩惱の願生心がそのまま質的に転ぜられて清淨願生心となるということに要約される。二の二種深信考は、まづ機の深信について、説一切有部で有を業有と解釈したことに注意し、その場合の業は、業果・苦果の果報をもたらず個々の業でもなく、それらの業の總和でもなく、それらの一切の根源にはたらく無明行の流れそのものを指すと推考し、宿業をそのような業有としての存在のもつ必然的な現在存在の在り方として捉えている。そして次に、法の深信については、十劫正覚という絶対の過去からの願力自然の必然であるとともに、往生淨土の絶対の未来が未来のまま現在前したものであるとし、信業開發の時剋の極促といわれる現在の信の一念は、証の未来と厳しい断絶を示しつつ、しかも証が信として現在化したものという、未来中心的な絶対現在というべきものであると考えている。三の宿業論では、親鸞における業の用語例、舟橋一哉博士と上田義文博士の仏教における親鸞の宿業観の特異性に関する論説について触れた上で、宿業の自覚とは、一切群生海との時間的、空間的な業的連関を、わが身の上に肉体的に感知することであると、それは如来廻向の信心の智慧によってのみ信じざれ

るものであると述べている。そして獲信において主我性が主他性に転ぜられた立場では、自業自得の道理による一切の業繫から解放せられ、業に縛られた世界をそのまま園林遊戯地として感得し、そこに無限に新たな歴史を創造して生きることとなると結んでいる。次いで四の宗教的決断では、従来その解釈をめぐって問題のある三願転入について、それを親鸞個人の体験に即しつつ、体験を超えた大信大行としての信仰の原事実を示したものであり、宗教的決断と反復のすがたを表わしたものである。そこから親鸞の回心の時期について、武内義範博士が二十願と十八願の關係についての深い洞察から、親鸞における第十八願への転入を関東時代と考える説、および金子大栄師の親鸞が法然の上にはみられない真仮分判の思想体系を確立したのは獲信以後においては自証されたものであり、吉水入室時について真仮を考えることには問題があるという説について考察した上で、著者は吉水入室の時を第十八願の他力の大信を獲得された回心の時とする。次いで、その吉水入室時の回心の事態について、それを宗教的実存の全存在における決断であるが、それは終生未来に賭けつづけるものであると解釈する武内説について、そこでは真の決断は決定であり、決定であるから決断が反復される、という点が見落されていることを指摘している。そして更に、得道の人との出合いにおいて第十八願に転入する宗教的決断は、信・不信ともにそのまま弥陀にまかせることであり、賭の信というべきであるとする星野元豊博士の説に従って、その決断は、すでに如来の本願によって選ばれているという選びに應えることとして、その決断は私の自発生にゆだねられているものであり、すべてを決定的に賭けてしまった主他的な絶対信においては、もはや疑は存在しないことを論証してい

る。そして著者は最後に決断の反復について、決断が真実である時、それは最初の決断の体験を経験的に執着するような立場を破って、常に今における信一念として不断に反復されるものであり、そこにあつては、私の行ずる称名が如来の不行として、そのすべが如来のはたらきに帰せられてゆくこととなると結んでいる。五の即得往生は、歎異抄の第十五条について、真宗のさとりを論じたものであるが。唯円におけるさとりについての基本的な見解は、さとりを身にあらわれたものとして捉える点にあると指摘し、唯円の主張は、煩惱具足の身にとつて、如来は絶対他者的に私に對するものとしてあり、浄土は絶対未来という態において信の一念に現在するものであるという立場から、横超と堅超の立場の混同を誠しめる点にあり、即得往生における必至滅度の意義を強調することにあつたとしている。六の親鸞の現世利益觀では、現世利益を祈願する呪術的信仰との訣別が、法然の浄土宗独立宣言の果した重要な歴史的意義の一つであつたこと、そしてそのことを徹底したのが親鸞であることについて論述する。すなわち、親鸞は、法然の説く現世をすぐべき様を現生正定聚として受けとめることによつて、浄土教が厭世思想とみられる誤解を払拭し、念仏を正信念仏として見出すことによつて、念仏に呪力を期待する詭譎を否定し去つたのであり、ここでは現世と来世は、信一念の絶對現在における現生正定聚の自覺として、立体的に捉えられていたことを指摘する。そして現生十種の益は主他的な存在にあらわれた如来の徳を示すものであり、現世利益和讃は、呪術的俗信に陥入っているものを、真実信心に導くための方便として撰述されたものであつて、功利心に根ざす即自的な現世利益を批判するものであることを注意している。

第四章の一の救済の根拠は、久松真一博士の真宗批判に依つて、信の宗教の本質について論証したものであり、本書の中でも最も力のこもつたものである。著者の引用文によると、久松博士の説は、人間は本来滅度の主体であり、現実の人間は、絶対自律的に自己自身の底から甦つて、現実に滅度の主体となるのであり、滅度の主体は絶対自者であるという立場から、方便法身としての弥陀も、法性法身となつた滅度の主体としての自己のはたらきのないいとされるものである。そこから、絶対他者的な仏の力による救いを説く信の宗教は、なお神律的な立場に留まるものとして、不徹底であるという真宗批判がなされる。著者はそれに対して、真宗の方便仏には応化身と、より根源的な如来としての方便仏の二義があり、久松博士の主張される方便仏は前者の第二義的な方便仏とみられるもので、後者の第一義的な方便仏と区別されるべきであるとする。そして、真宗における信は、方便法身として絶對他者的な相をとつた如来から与えられた信という性格をもっているが、それは単なる他者に対する對象的な信仰でなく、方便法身の誓願に帰入することによつて、法性法身としての自己に還えるという意味をもっていることを弁証する。そして、その信における転成のはたらきにおいて、凡心と仏心は絶対矛盾の自己同一として仏凡一体という信境を現成するのであり、罪惡生死の世界としての歴史的现实に立ちながら、しかも永遠によつて常に時が満されてゆくという信の在り方においてこそ、覺における時が無時間的現在として歴史性が稀薄であるのと異つて、歴史の中に生きる生き方を開くものであることを指摘している。二の如の意味では、不断煩惱得涅槃の成立根拠について考察し、救済は一如法界の根源的法則——生死即涅槃という涅槃それ自体の法則に基づく

ことを、論註の広略相入説によって解明し、その具体相を名号および信心のはたらきによる一如への還帰において捉え、本願一乗が一実真如の道として成就することを明らかにするとともに、親鸞の根本的立場があることを論証している。

第五章の一の浄土の存在と意義では、現代人にとつての躰ぎとなつている、浄土経典にみられる神話的表象について、それはあくまでも救済論的立場から解釈されるべきものであるとして、浄土と人間との具体的実践的關係を明らかにした三願転入に注意した上で、浄土を觀念の世界↓純粹感覺の世界として明らかにされた金子大栄師の浄土観によって、浄土は行証してゆく世界であり、有無の分別を超えた實在以上の實在の世界であることを指摘している。二の無量光明土については、浄土と名号の關係について、三の浄土の意味するものにおいては、浄土の意義に関する啓蒙的な解説がなされている。

第六章の教団・教学は、まさしく現代の問題である閉ざされた教団・教学から開かれた教団・教学への展開という課題に取組んだものであり、啓発されるところが多大である。なお付録として、専修寺高田派第十世の真慧上人の往生義についての論攷、および高田派に伝わる御書に関する論文が載せられているが、紙幅の都合上、それらの紹介はすべて省略する。

前上、各論文にわたつて、その論証内容や問題点については一切省き、著者の結論的な見解についてののみ、紹介してきたが、そこにもみられる信と時の問題についての考察、あるいは宗教的決断についての解明などには注目すべきものがあり、真宗学界に裨益するところ大であると信ずる。

(五六・九・一五)

(A5版 二九二頁 昭和五十五年七月 法蔵館 六五〇〇円)

(本学教授 真宗学)